

中日国交正常化40周年を記念して

Commemorating the Normalization of the Fortieth Anniversary of Diplomatic Relations between China and Japan.

鮑顯陽

BAO Xianyang

朝日大学経営学部経営学科

e-mail : baoxianyang@bfsu.edu.cn

要旨

中日国交正常化40周年（2012年9月29日）と筆者の日本語勉強歴40年（1973年—2013年）、また日本滞在10年目を迎え、両国関係と筆者個人のいままでの経験を振り返り、また総括する必要があると思う。いま両国間に難問が山積し、とても40周年を祝うムードがないようだが、それは絶対にあってはならないことだ。本文では中日関係やそれと関連付けての個人の体験を述べ、参考までに両国の関係強化の必要性、民間交流の重要性、問題解決の糸口を説いたものである。

キーワード：四十周年、蜜月期、成長期、成熟期、不惑期

1、はじめに

今年（2012年）は中日国交正常化40周年に当たる。この記念すべき不惑の年（論語・為政「四十にして惑わず」）に、中日両国がいろいろと総括すべきこともあるし、将来、どのように五十周年の天命（天命を知る）、六十周年の耳順（修養ますます進み、聞く所、理にかなえば何らの障害なく理解しうる意『広辞苑』）などを迎えるのか、また、両国は良き隣人としてどのように付き合っていたら良いのか、重要な節目の年でもある。正直に言うと、筆者の日本語の勉強歴も来年（2013年）で40年を迎えることになる。その40年の間に、筆者は10年間くらい日本に滞在し、さまざまな経験をした。いま振り返れば、やはり中日国交回復があるからこそ、筆者のいまがある。したがって、筆者もこの40年を総括する必要がある。次にこの両国関係と筆者個人の40年を10年一区切りに、蜜月期（1972—1982）、弱冠二十歳（1982—1992）、三十にして立つ（1992—2002）、四十にして惑わず（2002—2012）、すなわち4章に分けて総括してみ

たいと思う。

2、本文

2-1. 蜜月期（1972年—1982年）

中国において、この10年間の間の1972年から1976年まではまだプロレタリア文化大革命（1966年—1976年）の時期に当たるので、すなわちこの時期の前半部分は動乱期で、後半部分は改革開放の初期段階にあたる。

1972年9月25日、日本の当時の田中角栄首相と大平正芳外相は中国を訪問し、当時の中国の毛沢東主席と周恩来総理と会談した。それから9月29日に中国と日本は国交が回復された。もちろん、それは1972年2月21日に当時のアメリカのニクソン大統領が中国を訪問したことがきっかけとなったのであるが、日本がアメリカより先に中国と国交を回復したので、中国のことわざで言う「井戸を掘った人を忘れず」で、いまでも中国人はみんな田中角栄という名前をよく知っている。そして、いまいろいろと議論があるが、当時の中国は戦争賠償金の請求を放棄し、日本側もその代わり長期

にわたって、ODAや円借款などの経済援助で中国の近代化建設を支援していた。

実はその前にすなわち1950年10月1日にもう日本において日本中国友好協会が成立されたし、1952年6月1日、初めての中日民間貿易協定が結ばれたのである。また、人的交流としては1954年に中国赤十字代表団が日本を訪問したし、翌年の1955年に当時の中国科学院の郭沫若院長も訪日した。そして1955年11月に日本の片山哲元首相などが中国を訪問し、初めての中日民間文化協定が結ばれた。統計によると、1955年から1957年までの間、日本から293の団体、3272人が中国を訪問し、中国から27の団体、382人が日本を訪問した。翌年の1956年に中国京劇団も日本で公演を実現した。1963年10月に中国日本友好協会が発足され、その後の1965年8—12月の間に、日本から38の青年団体、400人余りの若者が中国を訪問し、中日青年交歓会に参加した。

私は1973年3月から日本語を専攻した。それはまさに中日国交回復をしてから、半年もたたなかったことである。それまでは日本語はあまり人気がなかったし、勉強する人も少なかった。やはり中国と日本は国交が回復されたため、日本語が将来必要になるであろうという国家戦略があったのではないかと考えられる。私が中学を卒業して、試験を受けて入ったのは北京市外国語学校（当時は修業年限2年の高校にあたるが、現・首都師範大学外国語学部）である。それまでは私は普通の中学校で英語を習っていた。北京市外国語学校も私たちが入るまで本来、10年制の小・中・高の一貫校で、七つの外国語の学科があった。それは英語、ロシア語、フランス語、スペイン語、日本語、アラビア語、ドイツ語学科である。また小学校3年生から生徒を募集していた。それは将来の外交官を養成するためだと言われていた。ただ1966年から文革のため生徒募集が中断していた。1973年にそれを再開したが、中卒から募集するようになった。私がおの一期生である。私は前述したように中学校で三年間英語を習ったあと、北京市外国語学校に入る際、英語の試験を受けたので、た

ぶん英語を引き続き習うだろうと考えていた。しかし、入学通知書には「日本語学科」とあったので、正直びっくりしたのである。私たちの場合は入学当初から小学校の先生になると言われていた。だから、私たちが入る時、北京市外国語学校の養成目標は変わったのである。当時中国には外国人が少なかったが、学校では一人の日本人の女の先生が教鞭を執っていた。それは徳地先生である。中国の国際放送局に勤める日本語の専門家のご主人と一緒に中国に来ていた。私たちは毎週その徳地先生の授業を楽しみにしていたが、やはり先輩たちの授業のほうが多かったようだ。そして、その間に初めて日本の大相撲を北京労働者体育館で見た。当時はお相撲さんがみんな裸で女性が見に行ってはいけないと言われていたが、それは噂で、本当は裸ではなく、また女性は土俵に入ってはいけないという決まりがあることを知った。お相撲さんの大きい体を見てびっくりしたことをいまでも覚えている。また当時は日本語関係の辞書もなく、父の古い日本語の辞書を使っていた。その辞書は「よう」ではなく「やう」、「寒い」ではなく「寒し」だった。日本語を習う前に確かに父のその辞書を見たことがあるが、片仮名や平仮名を見て、面白い文字だなあと考えたことがある。

1974年に学校の近くの北京展覽館で日本の展示会が開かれているのを聞いて、それを見に行き、初めて見知らない日本人に日本語で話しかけて、その言葉が通じたときの感動はいまでも忘れられない。

1975年に私は北京市外国語学校を卒業した。ほとんどの同級生は北京市の中学校に配属された。みんな小学校の先生になることを予想していたから、中学校の先生になっていいのではないかとみんなそう思っていた（当時北京の小・中・高校にはいろいろな外国語の科目があったが、その後、ほとんどすべて英語だけになった。いま、北京月壇中学校だけしか日本語の科目を設けていない。すなわち当時の同級生たちはその後ほとんど大学に入ったり、転職したりしていた）。ただ英語学科の2人と日本語学科の3人は中国国際旅行社北京

分社に配属された。私もその中に含まれていた。当時は旅行社といっても国営企業で業務は国家旅遊局に、人事などは北京市政府に所属された。また仕事はガイドではなく、通訳だった。当時は民間外交ということで、中国の外務省とも関係していた。私はその時から日本人と付き合いはじめていたのである。当時の訪中団はみな中国に好意的な団体で、中国へ来るのは観光目的ではなかった。日本教職員訪中団や部落解放同盟訪中団などを迎えて、天安門や故宮にも行くが、主に農村（当時は「人民公社」といった）、工場、解放軍（兵舎）、（小、中、大）学校、病院、57幹部学校（都会の知識人などが農村に下放されたところ）、防空壕（ソ連の奇襲を防ぐために作ったもの）等に案内していた。いま思えば、私が一番最初に担当した通訳の仕事は防空壕への見学であった。外国人に開放された防空壕は北京には二か所あり、一つは工場の中にあり、もう一つは前門という繁華街の店の中にあった。またその時初めて日本には部落民があることを知った。その後大学に入った時、大学で初めて見た日本の映画も部落解放運動に関するものであった。

1976年10月に四人組が逮捕され、10年間も続いた文革がやっと終結し、すべてが正常に戻った。その頃から私は本当のガイドとして働いていた。改革開放で中国には大量の外国観光客が殺到したからだ。それは本当の意味での観光客で、北京では万里の長城や明の十三陵、故宮博物院や天壇公園などを回るだけであった。当時は少人数の観光団だけでなく、日中友好の翼（チャーター機で来るお客さん。100人くらい）や友好の船（400人くらい）で来た観光客も多かった。その中には同年代の若者が多く、付き合っていてとても楽しかった。

1978年に私は中国の全国大学入学統一試験で北京外国語大学日本語学部に入學した。実は大学の入試制度も鄧小平さんの指示で急速復活されたのであった。プロ文革期最中の大学は推薦入学制に変わり、労働者、農民、解放軍の兵士でないと、大学に入る資格もなかった。私は旅行社に勤める

職員なので、どれにもあたらず、もちろんそのままだと、一生大学に入ることは到底できなかった。旅行社にいたときは、よく日本の代表団を北京大学や清華大学に案内したが、自分が大学に入れなことはやはり悲しかった。ただ当時旅行社に勤めている一人の運転手がいたが、その人の身分は労働者なので、推薦されて北京大学に入って日本語を勉強していた。そういう時代であった。私が大学に入れたことはやはり鄧小平さんに感謝せねばならないと思っている。外国語を勉強するにはやはり外語大がいいと思ったので、北京外大を選んだのであった。私は10月に大学に入学して、3か月後に飛び級をした。本来なら、高校時代の日本語の先生（先生も私と同様、プロ文革の最中は大学に入る資格がなかった）とクラスメートになるはずだし、またそれを楽しみにしていたが、その時、先生は日本語があまりにも上手なので、もう中国の外務省に青田刈りされて、学校にはいなかったのである。

1979年5月、入学から7か月目に、今度は学校側から「卒業して学校に残れ」と言われた。学校はやはり外国語の教員が足りなかったのだろう。また私の高校の先生のように中央省庁に青田刈りされては困ると先手を打ったのであろう。でもまだ勉強が足りなくて学生を教えるのは無理だと思って、学校側の計らいで復活されたばかりの大学院に9月に入って勉強することになった。この年から1993年に娘が生まれるまで、ほとんど毎年、私は夏休みを利用して古巣の中国国際旅行社総社や中国青年旅行社（同級生がその頃その日本部の副部長をしていた）に応援に行った。それは日本語の勉強もできるし、多少のアルバイト料ももらえるからである。一番魅力的なのは日本人と個人的に自由に付き合うことができることだ。旅行社に勤めたとき、日本人といつも一緒にいるが、それはあくまで仕事で、また、プロ文革の最中なので、禁止とは言わないが、日本人と個人的に付き合うことが御法度になっていた。さっそく1979年の夏に広州へ行って香港経由の日本からのお客さんを迎えた。広州は海鮮料理が有名だが、それ

とは別に蛇料理も有名だ。広州滞在中に、その蛇料理で日本人のお客さんをもてなした。当時知り合った日本人の友人は一番古く、33年たったいまでも付き合っている。

1980年の夏、日本で有名な中国語専門家の香坂順一先生が率いる「愚公会」という団体を北京外大で迎えた。「愚公会」の由来は中国の故事物語『愚公、山を移す』で、それは昔、愚公（愚かなおじさんという意）という人がいる。その人の家の前に山があって、とても不便なので、彼はその山を移そうと家族を連れてその山を掘り出した。知叟（賢いおじさんという意）はそれを見て、愚公に「あなたがどんなにがんばっても無駄だよ。その山を移せないんだよ」と嘲笑ったが、愚公は「私が死んだら、息子がいる。息子が死んだら、孫がいる。子々孫々まで掘り続けたら、必ず移せるんだ」と諦めずに掘り続けた。天の神様がそれを見てとても感動し、その山をほかの地方に移したという話である。すなわちどんなに難しいことでも努力すれば必ず成功するということである。「愚公会」のメンバーは主に社会人で、大阪の中国語愛好家たちである。その時に知り合った友人がいまでも多数いる。

1981年の夏に、アリスの北京公演を首都体育館で見た。初めてのJ-POPは印象的だった。谷村新司さんの「昴・すばる」もそのあと中国で有名になったし、千昌夫さんの「北国の春」(中国語版)もみんなにカラオケで歌われていた。この時期は山口百恵さんの「赤いシリーズ」が放映され、人々に好かれていた。百恵さんだけでなく、「大島茂」役の宇津井健さんも有名だ。また本名よりもその役の名前がみんなに知られていた。その後の「おしん」もそうであった。そして「君よ憤怒の河を渉れ」という映画が上映され、人気を呼んでいた。主演男優の高倉健さんや主演女優の中野良子さんは中国で知らない人がいないほど有名であった。イケメン男優と気の強い女優が多い当時の中国では、クールな高倉健さんとやさしい中野良子さんは非常に新鮮であった。その中で私は1981年10月に大学院を無事卒業した。

当時の日本人への印象はといえば、まず1、時間をよく守ること。2、団体行動をすること。3、何でもメモを取ること。その勉強精神に脱帽した。4、写真をたくさん撮ることだった。

この十年間は中日両国の間に本当にいろいろな交流があった。特にスポーツや芸術など民間レベルの交流も活発化し、確かに中国のサッカーチームや上海舞劇団も来日した。そして中日平和友好条約が1978年8月12日に締結されたし、1979年に大平首相が中国を訪問し、それ以降の29年間にわたって中国の近代化建設に色々な面でおよそ3兆5790億円くらいの資金援助をしていたので、中日両国にとって、まさに蜜月期といえるであろう。

2-2. 弱冠二十歳 (1982—1992)

第一章で述べたように、日本側はODAや円借款などで中国の近代化建設を支援していたが、その一環として中国で行う日本語教師研修プロジェクトがある。それは1980年から5年計画で中国の北京語言学院（現・北京語言大学）に設置された（それが1985年から北京外国語大学に移り、日本学研究センターと名前が変わり、現在に至る）。おかげで、私も1982年にその日本語教師研修班・いわゆる大平班（日本の故大平正芳首相にちなんだ名前。残念ながら、大平首相は1980年6月12日に急死したのである）の3期生として一年間日本語教師としての研修を受けた。その一年間は本当にいい勉強になった。そこで佐治圭三主任教授や金田一春彦先生等日本の有名な先生たちに日本語の教授法などを教わった。一番印象的だったのは1983年3月に日本外務省の招待で初めて日本を一月訪問したときのことだ。当時の中国人はなかなか日本へ来ることができなかったので、外国語教師としてはやはり相手国へ行って、実際に体験することが重要であった。当時は東京、大阪、京都、奈良などを回った。東京では仙台や富山などの友人がわざわざ会いにいらっしゃったし、大阪では「愚公会」の皆さんが歓迎会を催してくださった。外務省の計らいで作家の陳舜臣さんの講演を聞いたり、歓迎パーティーで憧れの中野良子さんとも会っていた。日本人の皆さんは本当に親切で、

優しくしてくださったのである。その時知り合った指導教官の東京女子大の進藤先生といまも付き合い合っている。いまも私はそのとき撮った写真を大切に持っている。また、研修に来た日本語の教師は中国全土から来ていたので、全国各地の大学の日本語の先生と交流もできた。1983年7月に研修を終え、北京外大に戻り、日本人の先生に習ったものを実際の仕事で活かした。これはすべてこの研修プロジェクトのおかげである。

1984年秋、217の団体、3017人の日本の若者を中国に迎えた。それは当時中国の胡耀邦中国共産党総書記が1983年に訪日の際、招待したのであった。日本の友人の皆さんと10月1日に中華人民共和国建国35周年記念式典に出席し、パレードや閲兵式も見たし、夜には花火大会にも出た。私は日本青友会訪中団の通訳を担当し、北京、南京、上海を回った。中国各地の青年との交流を通じて、日本の若者も中国のことを知るようになった。日本の青年と付き合い、とても楽しく過ごしたし、当時の団長の寺下さんといまも日本へ来るたびにお会いしている。両国の青年が互いに理解と交流を深めるために、日本の若者を中国に招待した意義が大きかったと思う。1985年10月に中国側から29の省、市、自治区の56の民族の代表504人が日本の47の都道府県の中の45を訪問し、友好を深めたのである。

1985年8月に私はまた日本を訪問した。これで二度目である。それは二週間、中国の計画生育委員会訪日団の通訳として日本を訪問し、開園間もない東京ディズニーランドに行ったし、福島市にも滞在した。そのころ私は何回か中国の計画生育委員会に借り出され、日本側からの訪中団の通訳を担当していた。一番印象的だったのは日本船舶振興会の故笹川良一会長の初訪中であつた。当時は中国の外務省や衛生省ではなく、中国計画生育委員会の招待で笹川会長ご一行は訪中し、当時の万里副総理とも会っていた。その後、笹川会長は何回も中国を訪問し、長きにわたり、中国のお医者さんを日本へ研修に招待したり、また笹川奨学金を作り、中国のたくさんの大学生を経済的に援

助したりして、中日の交流事業に尽力した。そして中国当時の最高指導者の鄧小平さんと会って、お互いに長生きしようと指切りをして約束をしたそうである。いまそれは日本財団と名前が変わり、当時一緒に中国に来られたお子さんの陽平さんが会長になり、お父さんの後を継いで、中日交流事業を続けている。2010年に中国の大連で行われた国際シンポジウムで陽平会長に久しぶりにお会いした時、会長は自分の著書を記念にプレゼントしてくれた。

1988年から1990年までの二年間、私は初めて日本に長期滞在した。三度目の訪日である。それは客員研究員として東京にあるD大学の中国語学科で中国語を教えることだった。この大学は当時の日本の中国語弁論大会でいつも優勝していたし、早くも1980年から私が所属する北京外国語大学と姉妹校になっている。当時日本の大学生の姿は非常に印象的だった。特に学生たちと一緒に合宿に行ったとき、学生たちが一所懸命に中国語の発音の練習をしている姿は、私の高校時代と重なったのである。また私たちは休みを利用して、日本の各地を旅行した。

当時日本はバブル期の真っ最中で、どこも活気に満ちていた。家内も私費留学で一緒に東京に来ていたが、そのアルバイト先の南方社長夫婦のご好意で、中国語サークルを作り、毎週の金曜日の夜に隣近所の人たちが集まって中国語の勉強をしていた。勉強以外にもいろいろと交流などをしていた。また、区役所も中国語教室を作り、抽選で集まってきた皆さんはその期間が終わっても、私たちが帰国するまで公民館で中国語の勉強を続けていた。

そのときに知り合った皆さんといまも文通などをしている。特に南方社長夫婦は私たちが日本へ来るたびにいつも会いにいらっしゃるし、またその後夏に何回も私たち一家を夫婦の軽井沢の別荘に招待している。

そして、この時テレビで懐かしい金田一春彦先生の姿を見たのである。それは竹下登首相の下、消費税法案が1988年11月に衆議院を通ったあとの

ことである。先生は竹下首相の招待で出席した会合で来賓として挨拶したのである。それはとても印象的な挨拶だった。その趣旨は次のとおりである。古来政治が良いと、文学が廃れる。政治が悪いと、文学が盛んになる。いまはまさに文学が盛んな時期を迎えているという挨拶であった。竹下首相はそれを聞いてただただ苦笑しただけだった。それは日本の知識人の権力に媚びない気骨を金田一先生が私たちに見せつけたような気がしてならないのである。

また、日本にいる間、1989年1月7日に昭和天皇が崩御し、6月24日に歌手の美空ひばりさんがなくなったことで一つの時代が終わったのを日本で実感したのである。

この十年間は中日両国にとっては成長期と言えるであろう。

2-3. 三十にして立つ (1992—2002)

この時期においては両国の関係は成熟期に入ったのである。まず1992年に現天皇が正式に中国を訪問し、そして1998年11月に中国当時の江沢民国家主席が日本を訪問した。この二つの出来事は皆史上初めてのことである。

私は1994年から1996年まで二年間、二度目の日本の長期滞在をした。これは四度目の訪日で、名古屋にあるN大学で中国語を教えることである。中国からの普通の訪日団や観光客は大体東京へ行って、それから新幹線で名古屋を素通りして大阪へ行くが、名古屋を中心とする中部地方は日本で一番国際化に力を入れているところだと感じている。前回の長期滞在と違って、この大学の中国語の授業は第二外国語である。

1994年3月に私が名古屋へ来た直後に名古屋空港で中華航空機墜落事故が起きた。とても悲惨な事故だった。台湾から遺族がたくさん来るが、当時名古屋には中国語のできる人がそんなに多くないようだ。それで、事故の処理に手伝ってくれないかという連絡が来た。学校で授業があるから無理だと丁重に断ったが、その時初めて名古屋に日中朋友会という民間組織があることを知った。

それは浅井さん夫婦を中心にして活動している

日中友好団体である。中国へ留学生や訪中団を送ったり、小学校を援助したり、日本国内で展示会をやったりして、地道な日中友好活動をしている。当時浅井さんの奥さんも家内について中国語の勉強をしていた。いまはお二人ともご高齢にもかかわらず、まだ友好活動を続けている。本当に心から敬服している。1994年からご夫婦も私たちの家族ぐるみの友人になったのである。

1999年に私はまた神戸にあるS大学に赴任した。任期は一年である。今回は初めて家族三人で一緒に日本へ来たのである。新しくできた関西空港で飛行機を降りて、海に囲まれた人口島を空港バスで神戸アイランドに向かう途中、その綺麗な海に三人とも見とれていた。神戸と言えば、1995年1月17日に阪神・淡路大震災が起きたところだ。当時私は名古屋にいたので、強い揺れを感じたし、テレビで震災当時の様子も見ていた。しかし、4年間で阪神・淡路大震災の傷跡はほとんど見られないので、日本の復興のスピードには目を見張るものがある、いまでも感心している。S大学や私の住まいは六甲山の中腹にあり、海も見られ、すばらしい夜景を毎日楽しむことができるので、内陸部に生まれ育った私は本当に幸せで、一年間楽しく過ごした。それも私だけではなかった。娘もよく区の児童館で遊んでいたし、友達もたくさん作った。そして帰国する際に児童館の先生たちは普段の行事のときに撮った娘の写真で写真集を作り、記念に私たちにプレゼントしてくれた。本当に心から感謝している。

この十年間は中日両国にとってまさに成熟期である。

2-4. 四十にして惑わず (2002—2012)

2006年10月に日本の安倍首相がそれまでの「政冷経熱（政治関係が冷え込んでいるが、経済交流だけが活発化している）」の状況を打開すべく中国を訪問した。それは「氷を破る旅」と言われていた。そして2007年4月に中国の温家宝総理が訪日した。それは「氷を溶かす旅」である。また2007年12月に福田首相が中国を訪問し、それを「春を迎える旅」と言っていた。翌年の2008年5月に胡

錦濤国家主席が日本を訪問し、「暖かい春の旅」と言われていた。これにより、5年ぶりに両国の首脳相互訪問が実現し、両国関係が完全に正常化した。当時せつかく関係が修復されたのだから、両国ともそれを大切にしようという機運が生まれた。

2003年に中国では新型コロナウイルスが流行しだした。そのせいで、私は本来2003年3月の末に朝日大学へ来るはずだったが、2か月以上も遅れて、6月4日にこの疫病が一段落してからやっと日本へ来ることができた。朝日大学は岐阜県にある。実はこの地名も中国と関係がある。それは中国の岐山と曲阜にちなんだ名前だ。特に曲阜は孔子様で有名なところである。岐阜は空気がよく、水も美味しいし、人情が厚いので、毎日とても楽しかった。また娘も大学の計らいで近くの小学校に編入学し、2年間元気に勉強していた。そして小学校側は娘のために定期的に岐阜大学の中国人留学生に来てもらって、いろいろと助けてくれた。大学側もいろいろな面で世話をしてくれたので、とても感謝している。ここで本当にいろいろないい体験をしたので、その後家内はこの二年間の間の私たちの体験をまとめて原稿にし、中国のネット上で発表したり日本の中国語新聞に掲載したりしていた。

2008年に私はまたD大学に客員研究員として一年間出向いた。この大学への赴任は二度目である。それは前回と違って、ただ研修するだけで、授業を担当しなかった。そして単身赴任であった。D大学で修士と博士の授業を聞いたり論文やテキストを書いたり、中国にいる私が指導する修士の学生の修士論文の審査をしたりして、充実した一年を過ごした。またとても懐かしかった。

2010年に埼玉にあるR大学を短期訪問した。R大学は観光学科に力を入れている大学で、私の教え子もそこで研修をしていた。中国ではいま旅行ブームで、特に海外旅行は人気がある。それを先取りしたようにR大学はアジア各国から大学卒業生を募集し、R大学の観光学科で研修させ、また二年に一度その大学の責任者をR大学に招待し、総括をするのである。とてもいい事業なので、今

後もぜひ続けてほしいとお願いをした。

2011年から私はまた朝日大学にお世話になって、現在に至る。すべてが懐かしく、楽しく毎日を過ごしている。来日一か月前に東日本大震災やそれによる津波と原発事故も起きたが、当時は偶然北京の家でNHKのニュースを見て、最初は非常に心配していた。でも、日本の阪神・淡路大震災の復興状況を見ると、日本の皆さんは必ずこの未曾有の自然災害に打ち勝つことができると信じるようになった。2011年4月に着任以来、大友学長はじめ朝日大学の皆さんに大変お世話になっている。特に2012年の夏、私が簡単な手術で入院した際、大友学長は忙しい中をわざわざ病院まで見舞いにいらっしゃったのである。本当に心から感謝している。

3、おわりに

2010年現在、中日両国における姉妹都市は245組あり、中国の25の都市と日本の15の都市と直行便がある。68万人以上の中国人が日本で生活し、中国で生活している日本人は6万人近くいる。2009年現在、日本で勉強している中国人留学生の人数は9万人余りで、中国にいる日本人留学生の人数も1万5千人余りいる。2010年の両国間の観光客の人数も延べ570万人に達している。

以上述べた筆者の体験のように、中国と日本は国同士の交流はもちろんのこと、民間交流も非常に頻繁になっている。また両国関係が成熟した証には、相手に遠慮せずに物が言えることだと思う。もう40年以上も付き合っていたら、相手の短所や長所がわかるであろう。それを知った上で、これからは仲良く付き合っていくことができると思う。ただ両国はいまやはりいくつかの問題に直面している。たとえば歴史問題と領土問題である。歴史問題は歴史の専門家に任せれば良いが、領土問題の解決は難しい。領土問題となると、双方とも譲れないのが普通である。それで、その解決には相当な政治判断が必要である。ただ中国の故鄧小平さんが言ったように「問題を棚上げにし、共同開発」もひとつの選択肢であろう。現状維持はもっ

とも適当な方法であって、わざわざ相手を刺激したり、相手の反感を買ったりするようなことは両国とも慎むべきであろう。幸い私が経験したように、両国の国民の間には友好を大事にしようとする流れがあるから、「愚公、山を移す」精神で問題解決を次の世代に任せても良いのではないか。

もちろんそれ以外にもいろいろな問題があるが、お互いに相手の考えを理解し、大人の対応をとれば解決できない問題はないと思う。

中日国交正常化40周年にあたり、その祝賀ムードを阻害するような動きがあって、両国関係がいままでになく冷え込んでいる現状が本当に悲しい。数年周期で歴史問題や領土問題が蒸し返される根本的な原因はどこにあるのか、その教訓を汲み取る必要がある。今後、両国の友好関係を維持していくためには、両国の政治家だけでなく、民間交流をもっと盛んにしていく必要があると思う。ちなみに、中日両国の民間交流に尽力された功績で、宮田理事長が2012年度中国政府の「中国国家友誼賞」を受賞された。まことに喜ばしいことである。私たちはみな宮田理事長に見習うべきであろう。

最後に、私事であるが、実は私の娘も今年(2012年)の9月から北京旅遊大学日本語学部に入り、日本語の勉強をはじめた。娘が日本語専攻を選んだ理由はやはり5年間も日本に滞在し、日本人の皆さんにいつも親切にしてもらったので日本が好きになったからであろう。娘が将来、中日友好交流の架け橋になるよう心から願っている。

以上は40年間にわたる一個人の体験と考えだが、もし間違いなどがあれば、ご批判とご叱責を承りたく存じる次第である。

〈参考文献〉

- [1] 榮紫哲也監修「20世紀・一冊100年」角川書店, 1998
- [2] 張声振、郭洪茂「中日関係史・第一巻」北京社会科学文献出版社, 2006
- [3] 馮瑞雲、高秀清、王昇「中日関係史・第三巻」北京社会科学文献出版社, 2006
- [4] 王芸生編著「六十年来の中国と日本」北京三聯書店, 2005
- [5] 徐之先編著「中日関係三十年1972-2002」北京時事出版社, 2002
- [6] 黄大慧、周穎晰編著「中日友好交流三十年1978-2008」北京社会科学文献出版社, 2008